

患者さんがより積極的に、治療に参加する医療へ ～オンライン診療への挑戦～

医師と患者をつなぐオンライン診療システム「YaDoc(ヤードック)」
(株式会社インテグリティ・ヘルスケア)

少子高齢社会が進むにつれ、核家族化、一人暮らし世帯の増加、医師の不足など、
様々な社会問題が医療の現場に不安をもたらしています。

そんな中、ICTを活用し医療の現場の効率を向上させながら、同時に医療の質の向上を図るための取り組みが始まりました。

新たな医療システムの創造へ

「YaDoc」は、親しい友人などとあいさつを交わす時の「やあ!」という掛け声に表されるように、医師と患者さんの距離を近づけコミュニケーションを円滑に進め、互いに信頼し合える良い関係に導いていきたいという思いから名付けられています。

患者さんは、体調の変化に気づいても、医師に容態を正確に伝えることができませんし、高齢者の場合はさらに困難を極めます。適切な診断、最良な治療をするためには、医師が患者さんの容態を正しく知ることが重要です。

「YaDoc」は、進化し続けるIT技術や通信技術を活用し、患者さんが発信する情報の集約と体調の変化を、医師が継続的に把握できるシステムとして注目されています。

はじまりは地域医療の現場から

株式会社インテグリティ・ヘルスケアは、グループ会社の医療法人社団鉄祐会とともに、超高齢社会に求められる在宅医療の普及と発展をめざし地域に歩み出しました。

在宅医療は、定期的に医師が患者宅や施設を訪問し診察を行うほか、患者さんからの緊急な相談があれば必要に応じて訪問します。離れているところからの電話だけの情報では、訪問の必要性の有無を判断することに困難を極めることもありました。また、

外来診療では高齢患者を中心に通院が困難な状態もしばしばである他、どのような患者さんであっても自身の症状を医師にきちんと伝えるのは難しいことです。そこで、離れていても患者さんの疾患や容態に合わせて必要な情報が正しく医師に伝わる仕組みが必要であり、それにはICTの活用が有益であると考えました。



オンラインモニタリングの画面

呼吸器系疾患のオンライン問診



(医師側)

(患者側)

その結果、私たちは医師が診察に際し必要とするバイタルデータや問診への回答(主訴)をICTを介して医師に伝え、必要に応じてビデオチャットで診察を受けることができるオンライン診療システムYaDocを開発しました。

具体的には、診察の前に疾患別の問診が搭載されているiPadに自分のバイタル及び主訴などを記入します。医師はその情報を確認しながらより質の高い診察を行うことができます。症状が安定し、かつ医師が判断をすれば、次回の診察をオンラインで受けることも可能です。対面と遠隔の診察を組み合わせ、患者さんが治療から離脱することを防ぐことも目的の一つとしています。

人生100年時代をめざす、進化する医療

2017年からは、「人生100年」時代の到来を見据えた福岡市の健康先進都市戦略に参加し「デジタル時代の医療サービスが実現されるまち」の実現をめざし、ICTを活用してかかりつけ医と患者さんがつながる医療システムの開発と普及を行っています。

「待つ医療から参加する医療へ」をコンセプトに、患者さんが自分の健康の変化にいち早く気づき、医師に伝えることができれば、医師はより適時・適切な医療提供が可能となり、患者さんはQOLの向上や重症化予防が図られます。そのような仕組みがある地域は、患者さん、ひいては住民がより安心して暮らすことができる地域となると考えます。

現在、20余りの医療機関の協力を得て開発・試行を重ね、全国で利用を開始する準備が進められています。

※ICT:Information and Communication Technology(情報通信技術)
※QOL:quality of life(生活の質)の略称。